

日付:2014年8月17日／聖書:イザヤ書52:7～10

主題:「共に喜び歌え」～教会創立56周年記念 賛美音楽礼拝

イザヤ書52章の舞台は、自国が敗戦し町や神殿が破壊され、人々は強制連行され奴隷とされた。この時すでに50年を経過している。そこには希望も夢も見出せないことかと思うが、しかし聖書は「歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃虚よ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。」(9節)・・・何故そのようなことが言えるのか？バビロニアに連行された人々の中に、決して希望を捨てない、神は生きておられるのだから、決して神は私たちを見捨てたのではない。そういう信仰を持ち続けている信仰者がいたのである。その折れない信仰が、このイザヤ書の言葉に記されている。

第二次世界大戦中ポーランドのアウシュビッツ強制収容所で殉教したコルベ神父がいた。彼は1930年からの6年間長崎で学問も教えていた。彼が祖国ポーランドに帰国するとやがて第二次世界大戦が勃発し、コルベ神父は強制収容所へ入れられた。収容所では、強制労働を行う傍らでコルベ神父は、収容者たちの相談役、死者が出るとお祈りを捧げて人々に希望を与え続けた。しかし収容所は、常に緊張感に包まれており、いつ自分が殺される番になるのか、少しでも誰よりも長く生き延びたいという空気に包まれ、ぎすぎすした世界があった。

ある日、厳しい収容所生活から1人の囚人が脱走した。見せしめに10人の死刑を執行することが決まる。収容所内で無作為に10人が選ばれ、死刑の中でも最も悲惨な刑、餓死刑が宣告された。コルベ神父は幸いその10人の中には選ばれなかったが・・・。餓死室へ歩き出したその時、1人の男が叫んだ。「私には妻も子供もいる。死ぬのは嫌だ」。するとコルベ神父は自分が身代わりになる事を申し出た。コルベ神父は、9人の仲間と共に苦しむことを自ら選んだのである。地下の餓死室に全裸で入れられ、1滴水さえ与えられる事無く次々に死んで行く。最後まで生き残ったコルベ神父は毒薬の注射を打たれて亡くなった。コルベ神父は、収容所の中で、冷え切った愛の無いぎすぎすした世界の中で、「愛が無い世界ならば、愛の行為を行えば、愛がある世界になる・・・」と語っていたという。コルベ神父の生き方には、「いかに美しいことか」と言っているように聞こえる。

あの十字架にかけられたイエス・キリストの生き方がまさに愛のないところに、希望のないところに、暗闇のところに、愛を、希望を、光を灯してくださったのである。何故、神の子とされるキリストが十字架にかけられ、血を流し、

苦しまれて死ななければならなかったのか？

イエス・キリストは、神の子として、この世に誕生した時に、「飼い葉おけ」の中に寝かされていたとある。飼い葉おけとは、家畜がエサを食べる餌箱のこと。イエスの人としての最初の歩みは、人間が寝かされるはずもないところから始まっていた。イエスは、常に小さくされた者、差別された者、病を抱える者、悪霊に取りつかれた者の側にいた。そして、そこで共に食事をし、共にお腹をすかせ、共に泣き笑いし、共に怒る…事をした。それは何故なのか？何故そのような歩みを神の子がされたのか？それは、この世がそういうところだからであろう。この世には、人間が人間扱いされない世界があり、悲しみや苦難がこの世にはあるからではないか。

イエス・キリストの十字架の意味は、「私は、あなたの苦しみ、悲しみを、私は知っている。私はあなたの苦しみ、悲しみを、私も担っている…」そういうメッセージがああ十字架の苦難にはある。そして、キリストは十字架で死んだ後、三日目に復活したとあるが、それは、あなたの苦しみ、悲しみを、決して失望のままで終わるものではない。必ず、復活がある、希望がある。キリストの歩みは、私たちにそのようなメッセージを投げかけている。そのことを覚えて、共に喜び、共に歌いたい。本日の賛美音楽礼拝を捧げつつ…。(神谷)